カートグラフィとフェイズ理論の和解？

大塚知昇

1. 理論的背景

本研究では、Chomsky (2015)の Free Merger、Chomsky (2013)の Labeling Algorithm、そして Chomsky (2004)の pair-Merge に基づき論を展開した。また、説明の対象とするカートグラフィ研究の例として、Rizzi (1997)以降提案されている、以下のような左周辺部構造を想定した。

(1) [ForceP -Topic*P-FocusP-Topic*P-FinP] (“*”は再起可能性を表す)

2. 問題提起

本研究では、カートグラフィ研究に対して指摘されてきた、理論的、経験的問題点をまとめた。理論的問題としては、以下の三点を挙げた。

(2) a. 多重の主要部の問題　　b. TopP の再起可能性の問題
c. 補部選択の問題

一方で、経験的問題としては、Erteschik-Shir (2007)が主張している以下の二点を挙げた。

(3) a. Topic と Focus を同時に満たす要素の問題　　b. Altruistic な要素の問題

3. 提案

本研究では、上記の(2)、(3)の問題に対し、簡素化左周辺部と Mapping 一般化の二つを想定することで、これらを解決することを目標とした。まず、Chomsky (2015)の枠組みにおいても形成可能な構造である、簡素化左周辺部について見たい。この提案を説明する上で、以下の二つの想定を行う必要がある。

・F 素性

Chomsky (2013)では、談話効力に関わる素性である F 素性の存在が示唆され、Epstein, Kitahara and Seely (2020)では素性の値が未分化である解釈不可能素性、(u)F 素性の存在の可能性が示唆されている。両者は偶然名前が一致するだけの存在であるが、本研究ではこの F 素性をフェイズ主要部に想定する。具体的にはこの F 素性は談話効力に関わり、いかなるカテゴリーの要素とも卓越素性共有による Label 付けが可能であると想定する。

・Force 主要部とフェイズ主要部 C

本研究では C 主要部と、それとは独立した Force 主要部を想定し、C 主要部は従来通りのフェイズを形成する主要部であるが、Force 主要部は、英語で言う that の具現化の位置を保証するだけの要素であると想定する。that は C が Force 主要部に主要部移動してそこで発音された結果であると想定する。

提案 1: 簡素化左周辺部

上記 2 つの想定のもと、F 素性に基づき、卓越素性共有の過程によって一層の左周辺部が形成される ((4)の下線部①)。そしてこの位置を挟み上下の位置に、pair-Merge によって要素が置かれうる (下線部②)。これらの過程により、以下 (4)の通り、左周辺部について 3 つの Area を導くことができる。また、C は Force まで主要部移動し、そこで that として発音されることになる。詳細は紙面の都合で割愛するが、本研究ではこの想定により(2)で見た 3 つの理論的問題点が解決されることを説明した。

(4) $\{_{ForceP}$ Force, <…pair-Merge Area 1…, $\{_{<F, F>}$ set-Merge Area <…pair-Merge Area 2…, $\{_{CP}$ C … $\}>\}>\}$
②　①　②

提案 2: Mapping 一般化

(4)で形成された 3 つの Area に対し、本研究では Mapping 一般化を提案し、当該の Area にどの談話効力が当てはまるかはこの一般化に基づき決定されると主張した。この一般化は、それぞれの言語において言語データに基づき独自に決定されるものであり、統語的な規則ではなく一種の語用論的一般化であるという立場をとった。ここでは詳細に立ち入ることはできないが、例えばイタリア語では (5)のような一般化が存在すると考えられる。

(5)　イタリア語の Mapping 一般化

a. pair-Merge area 1: Topic
b. set-Merge area: Topic, Focus, wh
c. pair-Merge area 2: Topic, no discourse interpretation

4. 経験的議論

紙面の都合上議論の全体を示すことはできないが、本研究の枠組みにおいて、カートグラフィ研究で説明されてきた以下のような事実を説明することができると主張した。

イタリア語:
・標準的な Force-Top-Foc-Top-Fin 構造
・Rizzi and Bocci (2017)のさらに精緻化された左周辺部の構造 (Int と Mod の存在)
・altruistic な談話効力要素

英語:
・Top-Foc 語順は許されても Foc-Top 語順は許されない事実
・Topic と Focus の解釈を同時に得る要素

V2 言語:
・V2 言語における左周辺部の欠如性

5. 今後の展望

今後の研究においては、まず Mapping 一般化の裏に何らかのさらなる一般化が存在する可能性を探る必要があることを示した。またこれまでの議論は CP 左周辺部に関わるものが主であったが、*v**P フェイズで何が起こっているかについて研究する必要がある。フェイズの並行性の観点から、動詞句 *v**P のフェイズ主要部 *v** にも F 素性を想定することで、*v**P 左周辺部を形成することは可能であると予想されるが、これについて(6)の可能性が考えられる。

(6)　フェイズ主要部が F 素性を有するか否かは、言語によって異なる。

そしてこの(6)の可能性のもと、(7)の論理的可能性が導かれる。今後、これらの特徴にあてはまる言語が存在するか否かについて研究を続ける必要がある。

(7)　a. C と *v**が F 素性を持つ　　b. C のみが F 素性を持つ
　　c. *v**のみが F 素性を持つ　　d. C も *v**も F 素性を持たない

参考文献

Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures* 3, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.

Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.

Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.

Epstein, Samuel David, Kitahara Hisatsugu and T. Daniel Seely (2020) “Unifying Labeling under Minimal Search in ‘Single-‘ and ‘Multiple-Specifier’ Configurations,” [lingbuzz/005095], (20 Feb, 2020, accessed 14 Oct, 2020).

Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information Structure: The Syntax-Discourse interface*, Oxford University Press, New York.

Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar*, ed. by Lilian Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.

Rizzi, Luigi, and Giuliano Bocci (2017) “The Left Periphery of the Clause: Primarily Illustrated for Italian,” *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 1-30, John Wiley and Sons, Hoboken, NJ.